

「地図豆」の地図を広げて街歩き

139 「荒ぶる川」の面影を探して水辺を歩く(11.0km)

【街歩きの概要】

「荒ぶる川」であったころの荒川の面影を探して、流路変更や河川改修が行われた浮間・岩淵あたりをたどる。



旧岩淵水門

ルートマップ



【道順】

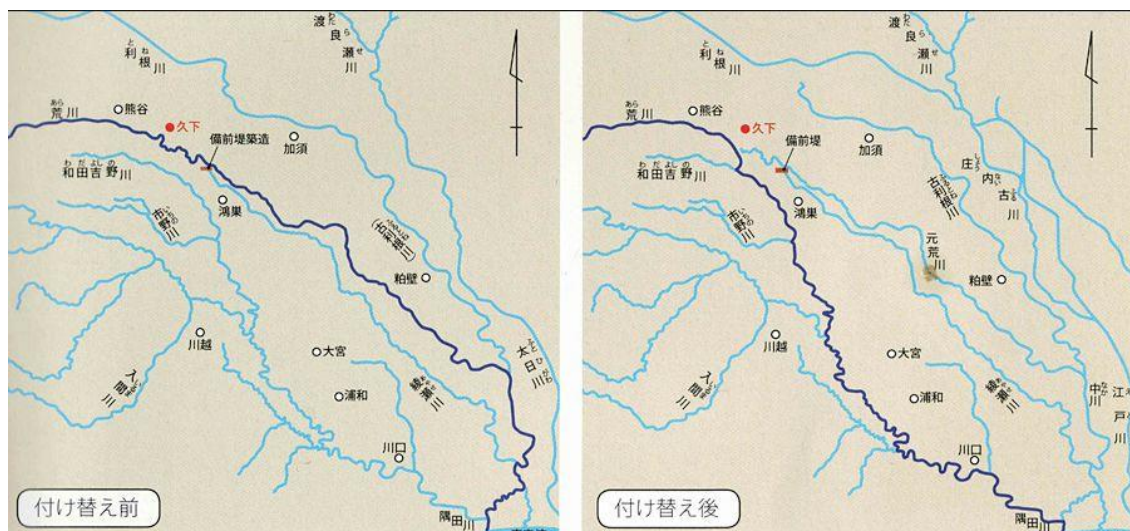
JR 埼京線浮間舟渡駅→浮間公園→桜草園場→氷川神社→北向地藏堂（浮間 2-4 地先）→かさや地藏（浮間 2-24-28）→水塚の蔵のなごり（浮間 2-13-1）→子育て地藏（浮間 3-34-26）→青面金剛庚申（浮間 3-11-25）→観音寺→浮間の渡船場跡（浮間 3-6 地先）→浮間橋（碑）・

荒川堤へ→小山酒造（岩淵町 26-10）→八雲神社→荒川岩淵関緑地・旧岩淵水門（赤水門）
→荒川知水資料館→熊野神社→西蓮寺→地下鉄大江戸線 志茂駅 or（→すずらん通商店街
→）JR 赤羽駅

地図豆知識：荒川の歴史

江戸時代以前の荒川は、現在の元荒川筋を流れ、越谷付近で当時の利根川（古利根川）に合流していた。当時の荒川はその名のとおり「荒ぶる川」であり、扇状地末端の熊谷付近より下流で、しばしば流路を変えていた。一方関東平野の開発は、氾濫・乱流を繰り返す川を治め、いかに川の水を利用するかにかかっていた。

江戸時代の寛永六年(1629)には、伊奈備前守忠治が荒川を利根川から分離する付け替え工事を始めた。熊谷市久下村地先において元荒川の河道を締め切り、堤防を築くとともに新川を開削し、荒川の本流を当時入間川の支川であった和田吉野川の流路と合わせ、隅田川を経て東京湾に注ぐ流路に変えたのである。以来、荒川の河道は現在のもの（下流は隅田川）とほぼ同様の形となった。

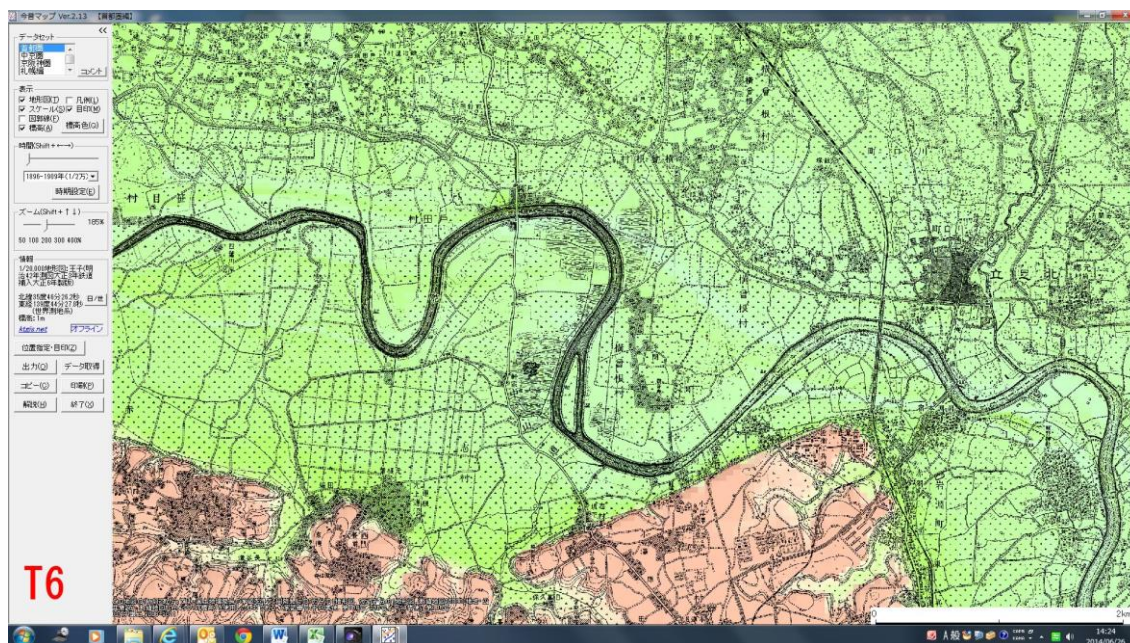


後世に「久下の開削」とも「利根川の東遷(とうせん)、荒川の西遷(せいせん)」と呼ばれるこの河川改修事業は、埼玉平野の東部を洪水から守り新田開発を促進すること、熊谷・行田などの古い水田地帯を守ること、木材を運ぶ舟運の開発、中山道の交通確保、さらに江戸の洪水の防御などを目的にしていたと言われている。これにより埼玉東部低湿地は穀倉地帯に生まれ変わり、また、舟運による物資の大量輸送は大都市・江戸の繁栄を支え、江戸の発展は後背地の村々の暮らしを向上させた。

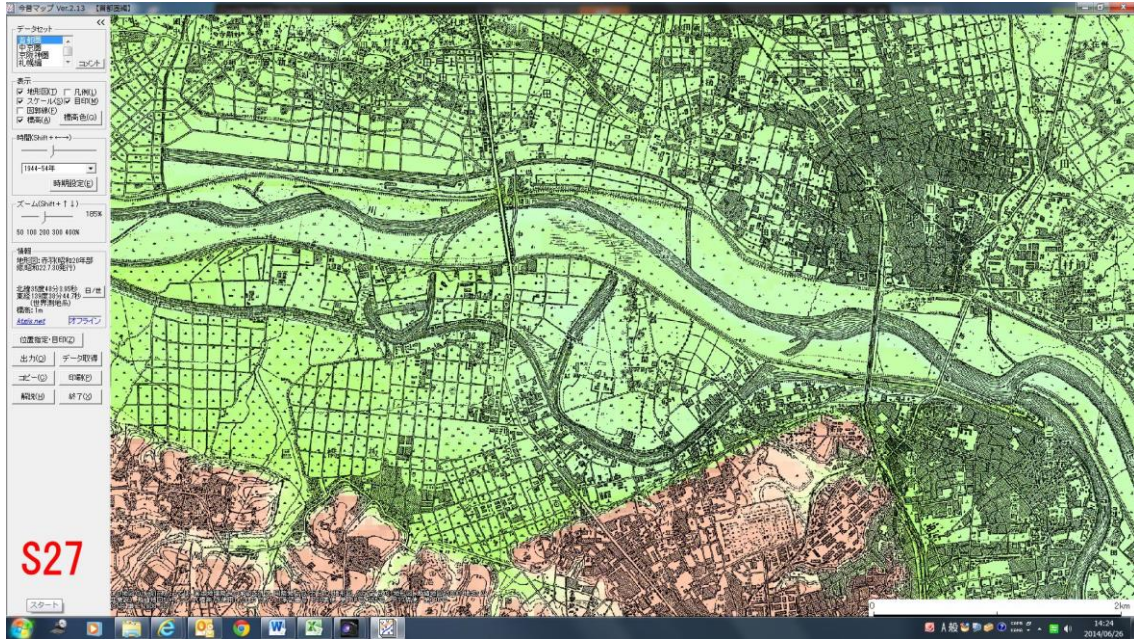
その後、明治 43 年の大洪水を契機に、東京の下町を水害から守る抜本対策として着手されたのが「荒川放水路」の開削である。この工事は、北区の岩淵に水門を造って本流を仕切り、岩淵の下流から中川の河口方面に向けて、延長 22km、幅 500m もの放水路を掘るとい

う大規模なもの。洪水時には、岩淵水門を閉めて本流（隅田川）の増水を抑え、洪水の大部分を幅広い放水路でいききに海に流下させるものである。全体の竣工には20年の歳月を要し、昭和5年に完成した。

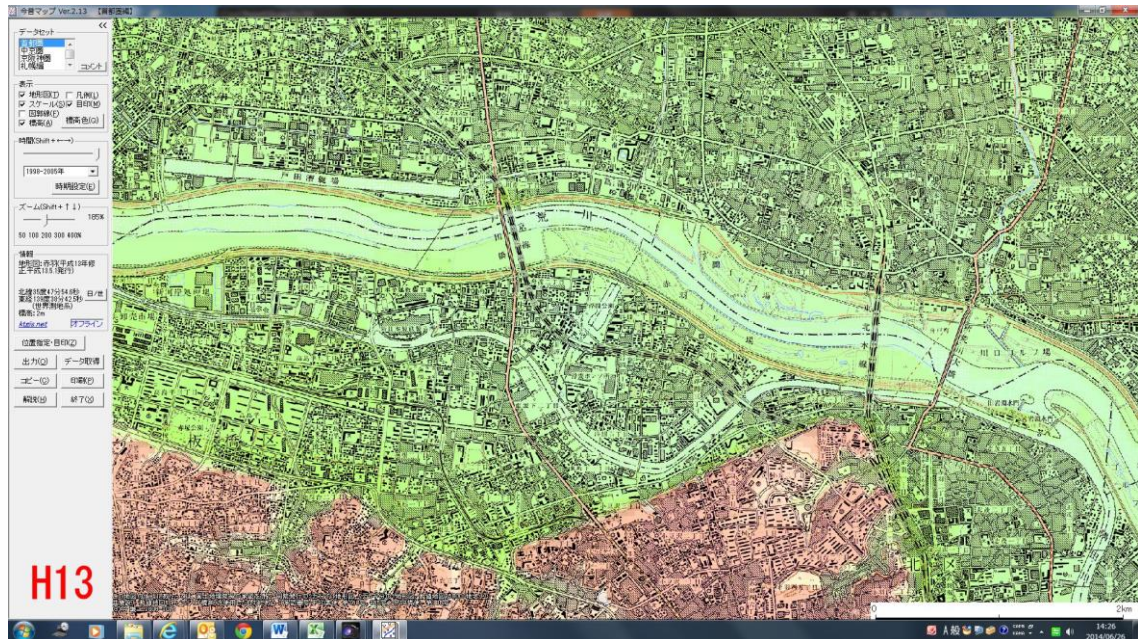
工事は、明治44年に測量、そして用地買収が始まった。東京の下町を洪水から救うという大きな使命を抱えた放水路計画である一方、計画地の住民にとっては、住み慣れた土地を手放さなければならないという辛い決断も強いられた。土地買収面積1,098町歩。移転個数1,300戸。こうして、すでに500万人を超えていた流域住民を水害から救うための放水路開削工事が始まり、のべ320万人もの人が働いた。



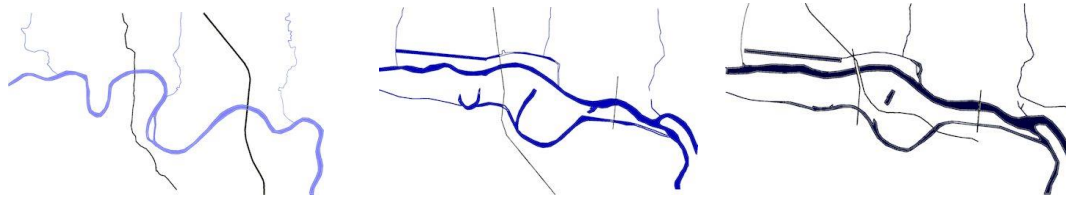
自然蛇行していたころの荒川（T6（1917） 1/20,000 地形図「王子」）



荒川放水路が完成したのちの荒川（S27（1952） 1/25,000 地形図「赤羽」）



市街化が進んだ現代の荒川（H13（2001） 1/25,000 地形図「赤羽」）



浮間周辺を流れる荒川流路の変遷

上3図の河川流路を模式化したもの、順に1917年→1952年→2001年

地図豆知識 水塚（みづか、みづつか、みづか）

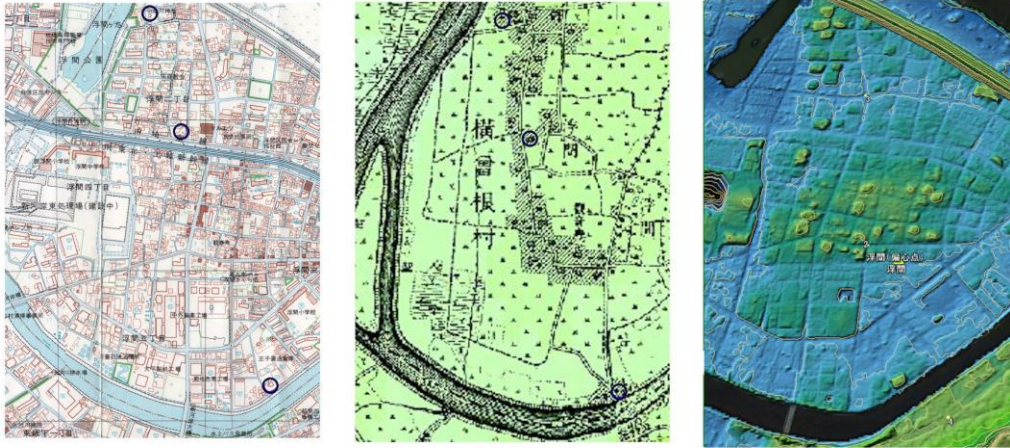
「水塚」とは、洪水の際に避難する水防施設である。母屋よりも数十センチないし3メートルほど高く盛土を施した上に設けられた倉などの建物、あるいはその盛土を言う。洪水時にその建物に避難し、しばらく生活が出来るようになっている。水塚のまわりには土崩れを防ぐため、芝などの根の張る植物を植え、軒下には洪水の際の避難用の船が吊るされていた。

2010年の利根川流域調査では、339か所が確認されている。「水塚」は立地場所ごとに、いくつかのタイプがある。①旧堤防（現在は道路）も含めた微高地と一体的になったもの、敷地全体が堤防の高さに整地され、その屋敷内に「水塚」があるもの。この場合、所有者の意識には「水塚」という認識は低い。②堤防とは無関係で、敷地は周辺の地盤面とほぼ同じで敷地内に水塚を有するもの、あるいは低地の田圃に独立した水塚。③個人では水塚を持たないが、付近の鎮守や寺が水塚（助命檀）となっているもの。

主に荒川・利根川流域のものが「水塚」の名称で呼ばれ、木曾三川流域・信濃川中流部では「水屋」、淀川中流部では「段蔵（段倉）」と呼ぶ。



水塚の蔵（浮間2-13-1） / 濃尾平野輪中の水屋の蔵



浮間周辺の「水塚」の分布

順に、1/10,000 地形図「赤羽」、1/20,000 地形図「王子」、デジタル標高地形図。デジタル標高地形図からは、旧集落部分の高まり「水塚」が容易に読み取れる。丸印は、北から順に氷川神社、浮間2丁目の水塚の蔵、浮間渡船場跡近くの水塚の位置を示す。

地図豆知識：青山 士 (1878-1963)

青山 士は、静岡県磐田市生まれの土木技術者。

パナマ運河建設に携わった唯一の日本人であり、荒川放水路の建設、信濃川大河津分水路の改修工事を指揮した。

青山は尋常小学校を卒業後に上京し、東京府尋常中学校（現在の日比谷高校）、第一高等学校を経て、東京帝国大学工学部土木工学科に進学した。一高在学時に内村鑑三の講演を聞き影響を受けて門下生となった。



1903年、大学を卒業した青山は単身渡米し、技術者としてパナマ運河開削工事に携わり、この期間中ガトゥン閘門の設計などを担当した。帰国後、1912年内務省に入省。同省土木局東京土木出張所（現在の国土交通省関東地方整備局）において19年に渡り荒川放水路（現在の荒川下流域）の建設工事を指揮した。荒川放水路を計画したのは原田貞介である。

1927 年には内務省土木局新潟土木出張所長になり、信濃川大河津分水路の改修工事に従事した。その後、第 5 代内務技監に就任、太平洋戦争中には、パナマ運河への攻撃を立案していた海軍からパナマ運河に関する情報提供を求められたが、土木技術者の良心に基づいて、これを拒否したと伝えられている。

【街歩き解説】

①浮間公園

浮間公園は、昭和 60 年に開通した JR 埼京線の浮間舟渡駅前にある。同公園は、「荒川放水路」の開削によって孤立した旧荒川の蛇行跡である。面積の約 40%がその水面を生かした浮間ヶ池で、池畔には公園のシンボルとして設置された風車が映え、多くの運動施設がある。



浮間公園 / 桜草園場

②浮間ヶ原桜草園場

辺りの浮間ヶ原は、その昔から桜草の名所として知られ、その季節には多くの人々が訪れて臨時の渡船場が設けられたほどだという。その浮間ヶ原の桜草については、田山花袋の『一日の行楽』、永井荷風の『葛飾土産』にも書かれている。しかし、昭和 3 年に浮間橋ができて渡船場は姿を消し、現地には浮間渡船場跡の供養塔群が残るのみである（浮間 3-6 地先）。辺りにあった桜草は、荒川の改修による環境の変化で激減してしまったが、昭和 38 年 8 月には地元の人々によって、浮間桜草保存会が結成され保存活動が始まった。その結果、現在は季節になると自生に近い状態で保存されている桜草を「桜草園場」などで鑑賞することができる。

③氷川神社・北向地藏堂（浮間 2-4 地先）・かさや地藏（浮間 2-24-28）

春には枝垂れ梅が咲く氷川神社の社殿は、「水塚」の上にある。

北向地藏堂は、かつては浮間村の北の入り口に外向きに建てられていたもので、堂の中央にある地藏菩薩は「いぼ取り地藏」「身代地藏」ともよばれている。

かさや地藏は、傘屋という屋号を持つ家の前にあることから「傘屋庚申」「傘屋地藏」と呼ばれている。



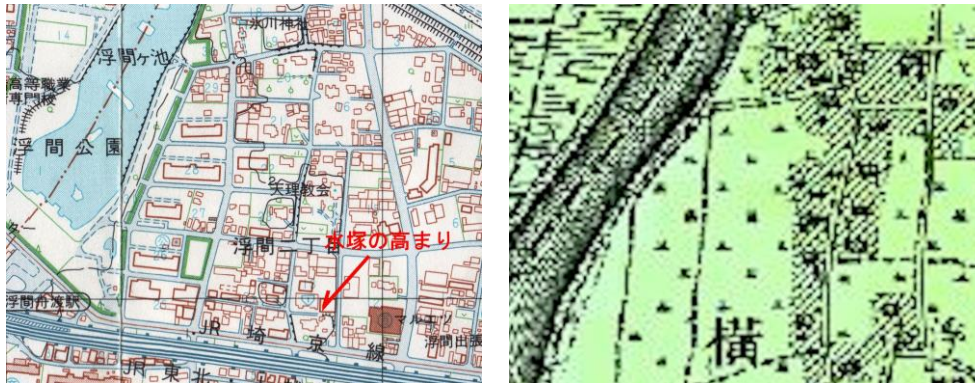
氷川神社 / 北向地藏 / かさや地藏

④水塚の蔵

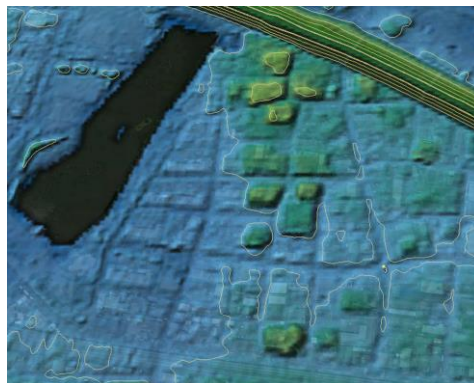
最もかつての形を残している「水塚の蔵」は、浮間2-13-1の民家である。そのほか同じ浮間2丁目の氷川神社や天理教会近くの高まりなどにその名残が感じられる。



緩やかな高まりの先に母屋がある水塚の蔵のある民家（浮間 2-13-1）



水塚の蔵辺りの現地形図と明治期の地形図（下辺が水塚の蔵の民家）



水塚の蔵辺りのデジタル標高地形図

⑤子育て地蔵（浮間 3-34-26）・青面金剛庚申（浮間 3-11-25）・観音寺

水塚の蔵からさらに南へすすむ。

子育て地蔵は、浮間にある三地蔵のひとつである。

青面金剛庚申塔は寛政 11 年（1799）の作で、青面金剛の頭上には蛇がとぐろを巻き、髪が左右に分かれている。

観音寺には釣り鐘が二つあって、その一つは、戦時中に武器を作るため釜や銅像などとともに金属供出させられたのち、昭和 58 年に浮間に帰ってきたもの。現在使われている鐘は戦後作られたもの。



子育て地蔵 / 観音寺

⑥浮間の渡船場跡と浮間渡船場跡の供養塔群

さらに南進して新河岸川縁まで進むと、浮間渡船場跡の供養塔群がある。

かつて、浮間には荒川（現新河岸川）の渡船場があり、対岸の板橋区小豆沢とを結んでいた。渡船場は浮間村が運営しており、船賃は村の道の修繕、村社の修復などにあてられていたという。

供養塔群近くにも、水塚を思わせる高まりがみられる。

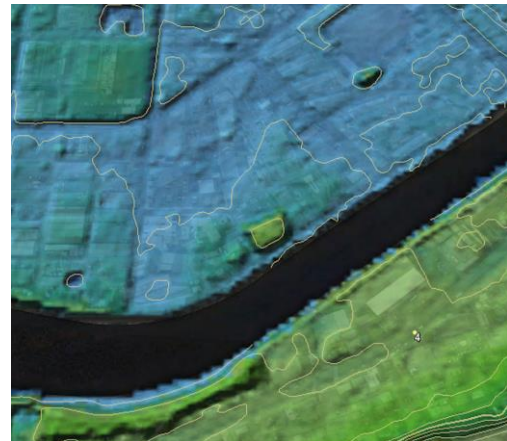


中外製薬から新河岸川にかかる新河岸大橋方向（川へ向かうと常に上る）

/ 浮間渡船場跡の供養塔群



水塚を思わせる住宅地の高まり



水塚を思わせる住宅地付近の地形図とデジタル標高地形図
地形図では住宅地を2mの等高線が巻いているのが見える

⑦浮間橋（碑）・荒川堤へ

新河岸川に沿って北上し、浮間橋から荒川堤へと進む。新河岸川堤防はコンクリートの垂直になった堤防で、俗称カミソリ堤防である。もとは、内務省の隠語で「切れやすい」堤防のことを「カミソリ堤防」としていたのが、いつの間にか垂直のコンクリート堤防に使われるようになったとか。

浮間橋のたもとは、赤羽にあった近衛師団工兵隊の手で、昭和3年に木造の橋が建設されたことにちなむ「浮間橋建設記念碑」の流れを引き継ぐ「浮間橋の碑」が立つ。



新河岸川のカミソリ堤防 / 浮間橋先の新河岸川



浮間橋（の碑） / 小山酒造

⑧小山酒造

新荒川大橋のもとには 1878 年（明治 11）創業の東京 23 区唯一の蔵元「小山酒造」がある。付近一帯の地下には秩父山系から流れる浦和水系が走っており、この地下水を利用して清酒「丸真正宗」がつけられているという。

⑨八雲神社

八雲神社は岩淵町の鎮守社で、敷地全体が土盛りされた水塚になっている。「祭神の須佐之男尊はキュウリ畑で命が救われたという伝説があるため、キュウリが祀られている。そして、キュウリといえば河童がつきものだから？ このあたりには河童伝説もあるとか。



八雲神社近くの水塚の石積み

⑩荒川渡船場跡（新河岸川端辺り）

岩淵水門の西にある新荒川大橋付近には、岩淵宿・川口宿を結ぶ渡船場があった。それは明治以降も利用されていたが、1928年（昭和3）の新荒川大橋開通によって廃止された。荒川対岸の農地へ向かう渡しも2カ所あり、1カ所は放水路の工事で農地が河川敷となり廃止、もう1カ所は1933年（昭和8）頃までであった。

じつは渡し船は現在も存在していて、それは隅田川の志茂・足立区新田間を結ぶ（株）日本化薬東京専用の渡船である。1949年（昭和24）から渡船の運航を開始。従業員の通勤や業務連絡などで随時運航している。1日平均277回の運航で平均259名（年間6.4万人強）が利用しているという。



荒川堤 / 荒川放水路記念碑

碑には、作業員とともに常に現場に出ていたという、青山士の書が残る

⑪荒川知水資料館

荒川を紹介する荒川知水資料館の前には、荒川放水路記念碑がある。作業員とともに常に現場に出ていた青山士は、碑文にこう記している。「此ノ工事ノ完成ニアタリ多大ナル犠

牲ト労役トヲ拂ヒタル我等ノ仲間ヲ記憶センカ為ニ」と。

このあたりの荒川の堤防の高さは（A.P.）12.5m。一方、隅田川の堤防の高さは（A.P.）7m。荒川に流す水の量のはるかに多いので、そのぶん堤防を高くしているのだという。

A.P.とはArakawa Pailの略で、Pailはオランダ語で基準という意味である。1873年（明治6）に隅田川河口部の霊岸島に水位の高さを計る量水標が設置され、そのゼロの高さをA.P.ゼロに設定した。A.P.は、荒川水系の水位の基準であるから、堤防の高さもこれをもとに決められている。



導水堤の石積みと荒川を望む / 旧岩淵水門から岩淵水門を見る



オブジェ『月を射る』

⑫旧岩淵水門

荒川は、「荒ぶる川」という名のとおり氾濫を繰り返してきた。旧岩淵水門はその要として、大正5年から8年間の歳月をかけて建設された。もちろん、この工事を監督したのは青山士である。以来、同水門は荒川下流域にすむ人々の暮らしを洪水から守ってきた。

昭和30年代の改修工事で赤い色に塗りかえられたことから「赤水門」という愛称で地元の人々に親しまれているこの水門は、現在水門としての役目を終え、下流にある青い岩淵水門が役割を果たしている。旧岩淵水門のすぐ横に架かる橋から、新水門を間近に見ることができる。

この水門橋を渡りきったところにあるのが「荒川赤水門緑地」。周囲の石積みやここから眺める荒川上流の景色は堤防縁から見るものとは違った趣がある。緑地には青野正作の『月

を射る』というオブジェがあり、木立の中には「草刈の碑」がある。昭和13年8月から行われた「全日本草刈選手権」を記念したものである。

⑬熊野神社

荒川堤を後にして赤羽駅へと向かう。

熊野神社は、近隣の西蓮寺の住職が1312年（正和元）に創建したという志茂の鎮守社。本殿は土盛りした水塚になっている。この辺りでもデジタル標高地形図を広げれば、その様子が明らかになるはずだ。



熊野神社絵馬殿の絵馬 / 西蓮寺

⑭西蓮寺

西蓮寺は、白壁に囲まれた寺院で、境内には整備された庭園がある。

本尊は鎌倉初期に作られた、北区指定有形文化財の木造阿弥陀如来坐像である。また、板碑（供養塔の一種）も数多くあり、最古のものは鎌倉時代のものである。西蓮寺周辺は旧下村の中心部にあたり、集落は微高地（自然堤防上）にあった、それでもたびたび洪水にさらされたので、宅地を土盛りしたり、避難小屋を建てたり、舟を備えてもいたという。辺りにも、高い敷地に建った旧家が多く、洪水対策の名残をとどめている（水塚）。

その後、すずらん通商店街を経て赤羽駅へ向かって終わる。



志茂すずらん通り商店街

(短縮コース)

139-2 「荒ぶる川」の面影を探して水辺を歩く (5.0km)

【道順】

JR 赤羽駅→赤羽 1 番街→大満寺・正光寺→小山酒造 (岩淵町 26-10) →八雲神社→岩淵橋→荒川堤→荒川岩淵関緑地・旧岩淵水門 (赤水門) →荒川知水資料館→水難供養の地蔵→熊野神社→西蓮寺→地下鉄大江戸線 志茂駅

+ * * * + オフィス 地図豆 Yamaoka mitsuharu + * * * +